

2010年度第1回研究会報告書

タイ文化圏における山地民の歴史的研究

2010年度第1回研究会

日時 2010年05月8日(土) 午後13:00~18:00

場所: AA研セミナー室(301)

報告:

1. 共同研究員全員

『叢書:知られざるアジアの言語文化』について

2. クリスチャン・ダニエルス (AA研所員)

「成果論文集の叩き台:James C. Scott *The Art of Not being Governed: an anarchist history of upland Southeast Asia* が提示する見方」

3. 川野明正氏 (明治大学准教授)

「中国西南地方の蠱毒と呪術伝承」

研究会開催の趣旨

本年度は当該共同研究プロジェクトの最終年度に当たるため、第一回の研究会では成果論文集を作成するかどうかという問題について時間を割り当てた。成果論文集刊行の件は昨年度からの継続審議事項であるが、叩き台として主査のダニエルスが昨年に刊行され、話題になっている James C. Scott *The Art of Not being Governed: an anarchist history of upland Southeast Asia* を紹介した上で、成果論文集の柱となる課題を提起して、共同研究員に議論して頂いた。

また、これまで山地民の宗教活動において、呪術や仏教が果たした役割が指摘され、たびたび議論の対象となっている。この度の研究会で、タイ文化圏と重なり合う中国の雲南省において如何なる呪術伝承があるのかについて、川野明正氏に発表して頂いた。さらに、これらの研究発表の前に、執筆予定者に『叢書:知られざるアジアの言語文化』の執筆計画に関する発表をして頂き、また今年度の研究会活動について話し合いをもった。(唐立)

報告の要旨

1. 『叢書:知られざるアジアの言語文化』について

本年度、このシリーズで刊行する予定のベトナム黒タイ族年代記の和訳について樫永真佐夫共同研究員から説明があり、本年度の秋に入校ができるとの報告あった。

今後の刊行計画については次のようなことが報告された。黒澤直道研究協力者から配布資料に基づいて、『ナシ族古典文学—『ルバルザ』・情死のトンバ経典』の進行状況について説明があった。(唐立)

2. 「成果論文集の叩き台：James C. Scott *The Art of Not being Governed: an anarchist history of upland Southeast Asia* が提示する見方」

著者のスコットは、Zomia（ベトナム・カンボジア、タイ王国、ミャンマー、インド東北部、中国の雲南・貴州、広西及び四川の一部）の標高 300 メートル以上の山地に居住する山地民の歴史と文化を描き出そうとしている。スコットはまず山地民を、平地の水田国家 (padi state) から逃避した人びとで、統治の圧制からの脱走者であると定義しておく。そして、山地民の居住地（険峻な山岳地帯）・生業・社会組織・イデオロギー・口承文化は平地の国家に組み込まれないような戦略であると論じる。なおかつ、その戦略は山地民が自主的に選択したものであると強調する。

山地民が選択した政治戦略として、国家回避 State Evasion がある。山地民は居住地として水田国家がアクセスしにくい山地を選択して、なおかつ分散した形で居所するようにした。これは水田国家からの収奪（徭役・納税）と奴隷狩り商人からの襲撃を回避するためである。生活を維持するために、山地民は焼畑農耕など国家を回避するための農業 (escape-agriculture) を営み、栽培する作物も回避を容易にする escape crops である。また、首領権力と階層化を極端に嫌う山地民は、自己社会の中において、国家権力が形成できないようなメカニズムを有している。その結果、山地民は自己の社会を「回避社会構造 (escape social structure)」に作り上げた。山地民は平等主義、自治及び可動性を貴び、これらは山地民の価値観の中心をなしている。国家を持たない、民主主義を重んじる山地民社会の特色は可変性(plasticity)である。山地民の村落は分裂して、村民が移動して、よそ者を受け入れてまた新しい村落を建設するというのが基本的なパターンである、と著者は論じている。

回避という戦略は、読み書きにおいてもみられる。著者は山地民が国家形成・国家権力の侵入を阻止する戦略として、無文字を意図的に選択した仮説を提示している。東南アジアの無文字民族集団は2千年もの間に、テキストや記録などを使用する水田国家（但し読み書きができる人口は極少である）と接触してきたため、無文字を維持することが水田国家に対して距離をおく手段であるとしている。

また、山地民のエスニック・アイデンティティーの創生も戦略の産物であるとされている。そのアイデンティティーが水田国家の政治権力と資源をめぐる競争過程において創生された。山地民にとって、選択肢は無国家状態 (statelessness) のままで生活するのか、水田国家に組み込まれるか(incorporation)のみであった。組み込まれないためには、山地民がいつでも移動して別の民族集団の付近で暮らす準備をしておく必要がある。したがって、山地民は二つ以上のエスニック・アイデンティティーを使い分ける行為に矛盾を感じないで、近隣の民族集団と交流している。著者は彼らをエスニック両生類 (ethnic amphibians) と呼んでいる。

このように高等な「回避社会構造」を作り上げた山地民は村内分裂など国家を回避する手段をもっているが、平等主義を重んじるため一致した行動を取ることができない。山地民が民族集団を超えた形で一致団結できるのは、権力とリネージを超越した預言者的・救世主的人物の介入によってのみ出現しうるとスコットはしている。預言者的・救世主的人物は大乗仏教、上座仏教やキリスト教など平地の宗教・文化的装置を借用して、千年王国運動を展開させる。彼らの活動は、(1) 水田国家からの侵入を防止し、(2) 山地民に反国家的思想を強化する結果をもたらす、とスコットが論じている。

本書は以下の三点について新しい見解を提示している。

- (1) これまでの国家建設論では、その反面として存在する故意の無国家状態 (statelessness) という側面が無視されてきている。国家建設は人口を確保することによって成し遂げられた。初期の水田国家は他の国家から領民を略奪するか、国家に属しない山地民を組み込むかことによって建設された。著者は山地民の歴史が計画的に国家に統治されないようにして、参与しない人々の歴史だとしている。歴史学者は東南アジアの近代国家を「古典王国 classical kingdoms」の継承者として位置付けた立場から、proto-nation や proto-nationalism などを探しだしているが、スコットはそのような国家＝民族を基準とした歴史観を克服することが必要だとしている。
- (2) 著者はこれまでの文明論における「原始」や「野蛮」の解釈を否定して、これらの概念は国家建設・国家運営の過程の中で生成されたとしている。その説によれば、野蛮人とは国家が統治できない、特に、徴税できない人々を意味する。国家の構成員は国家の統治を回避するために、山地に逃げ込んで採取狩猟や焼畑農耕など「原始的」とされる生業を営む「自己野蛮化」する場合がある。したがって、「野蛮」は人びとが自主的に選択する戦略、統治されない戦略である。
- (3) ビルマ人とタイ人が北方から移住してきて水田耕作を営んでいた先住民を征服して、盆地から先住民を駆逐した仮説がある。著者はこの征服説を否定している。スコットによれば、水田国家はビルマ人とタイ人の開拓的エリートによって建設されたが、そのエリートは先住民や山地民を組織することによって水田耕作のコアエリアを作り上げたとしている。つまり、スコットは征服する武力そのものではなく、エリートが労働力を軍事・政治的に組織する能力に注目して、それを強調している。したがって、シャン人は元山地民であり、ビルマ人は盆地と山地に居住していた非ビルマ人 (シャン、カチン、モン、クメール、ピュー、チン、カレン) を取り入れることによって登場してきた民族集団であると論じている。

(ダニエルズ)

3. 「中国西南地方の蠱毒と呪術伝承」

本発表は中国南部の漢族・非漢民族を問わず諸民族に広く伝わる蠱毒(こどく・GuDu)伝

承などの呪術伝承を主題とし、中国西南地方(わけても雲南省・広西壮族自治区)での様相を論じた。

本発表では以下の呪術伝承を扱った。a. 蠱毒＝毒虫や蛇・爬虫類などを使用した「霊的な毒物」に関する伝承。b. 運搬霊＝「山中の精」ともいうべき、山魃・五通神などに代表される精怪の類で、共同体内部に入り込み、特定家庭の富の獲得を援助するとされ、周囲の家庭から富を運搬する霊物についての伝承。c. 鬼妻＝蠱毒などの霊薬を駆使して、恋愛の成就や異性を身边に留め置くための呪術を行うとされる寡婦の伝承。d. 鬼人＝鬼(靈魂)でもあり、人でもあるような二重性をもった生霊的人物に関する伝承。

発表前半は蠱毒の諸特徴を日本の憑きもの伝承の事例(トウビョウ・イヌガミ・オーサキ・ゴンボダネなど)とも比較しつつ、以下の論点を示した。a. 「容器＝内＝存在」としての蠱毒＝主に蠱毒の製造法と飼育場所に関わる問題、b. 「運搬霊」としての性格＝致富の手段としての蠱毒の諸性格、とりわけ共同体内部の特定家庭の富の獲得に関する言説を形成する点、c. 扱い主と呪術的霊物との相関関係＝扱い主と蠱毒の不可分かつ密接な霊的關係性に関わる諸問題、d. 増殖する霊物の過剰性＝蠱毒の増殖的性格と、財富の獲得成果の程度には密接な関わりがあること、e. 利益と損失が表裏一体であるような両義的な性格＝蠱毒による蓄財の成果と制御不能に陥る危険が比例的に増加すること、f. 転嫁法＝蠱毒が増殖した結果の制御不能を防止する手段として、蠱毒の転嫁に関する伝承があり、特定家庭の盛衰を説明する点。

発表後半は、呪術伝承を記録した漢人側の非漢民族に対する他民族表象の問題を論じた。

蠱毒については、漢人にとり、旅店の宿泊・食物の購入・宴席の参加など、非漢民族との交渉が生ずる場面で遭遇する危険で、現地民族が漢人より不利益を被った際の復讐・防衛手段と考えられていた点を論じた。

鬼人伝承は、「地羊」(DiYang)・「僕食」(PuShi)などの呪術伝承を取り上げた。地羊は旅行者の足を木に替えるなど、非漢民族居住地域より帰還不可能となる漢人側の恐怖を語る。明末以来雲南地方志文献において「種人」の範疇ともなり、その際「地羊鬼」(DiYangGui)と表記され「鬼」(Gui)として、つまり中華の世界観における教化範囲外の「化外の民」の他民族イメージを漢人の間に生じていた。これは漢人の西洋人(広東語の「鬼佬」・GuaiLao)や日本人(「鬼子」・GuiZi「東洋鬼子」・DongYangGuiZi)に対する他民族イメージの根源の一つでもある。また、「僕食」も「鬼」としての他民族イメージの一形態と考えられる。僕食は、特定人物の魂が夜分身体から脱けだすとされ、脱魂型の鬼人である。猫・牛・馬などに化すという動物変身譚的内容をもち、漢人旅行者にとり、睡眠を避けて警戒すべき危険であり、現在のラフ族における同種の伝承ともほぼ同様の内容で明代中期から語られる。

鬼妻伝承は明代中期より広西地方でみられ、清初には雲南地方に関する記事に記載される。現地のタイ族・チワン族系の寡婦が、漢人の旅行者の愛情を繋ぐために仕掛ける呪術とされ、漢人側でも異地に留め置かれる恐怖を語る伝承として、キャラバンや行商人の間で異民族間恋愛の禁忌をも伴っており、極めて重大な危険として認識されていた。

以上、本発表は漢人の边疆旅行に伴う危険として、漢人側の呪術伝承に関する認識の諸相を論じたものである。(川野明正)

二つの発表に対して活発な質疑応答が行なわれた。川野氏の発表に対して、蠱毒は何故華北にはなく、華南に多いのか、また漢族が非漢族を野蛮人として、不合理の利益を得るために蠱毒を使用したのかなどについて議論が展開した。また、ダニエルスが紹介したスコットの諸論点についてさまざまな意見が表明された。スコットが政治学の立場から立てた論理はとても明快ではあるが、それで山地民を取りまく複雑な実態が果たして把握できるか、また史実に合わない点もあって、批判と疑問が多く提示された。しかし、スコットが提出する脱構築論によって、山地民の価値観がはじめて見えてきて、山地民の世界を研究するために、参考にすべき論点があるとの評価もあった。共同研究員各自が執筆する予定の論文については、本年第二回の研究会において各自が具体的な案を提出して皆で議論をすることが決定された。(唐立)